

欧州を中心に進められている動物実験代替法の推進。今後化粧品のみならず、化学や医薬品など他の業種でも広がるのが予想され、安全性を担保できる技術開発が急務となっている。国内における代替法開発の中核組織を担う日本動物実験代替法評価センター（JaCVAM）の小島肇事務局長に、化粧品領域における動向や今後の展望などについて聞いた。

◇ 欧州での動物実験代替法開発は、どこまで進んでいますか。
光毒性や皮膚刺激性などを除き、多くの試験法における代替法が未だ確立されておらず、動物実験に頼ら

日本動物実験代替法評価センター

JaCVAM

小島 肇 事務局長



日本の開発力をアピール

ざるをえない状況となっている。これを受け、ポジティブリストにおいては動物実験の全面禁止となる発効時期を当初予定していた2

013年から延長するという話も出てきている。残り1年で、どのような対応策が発表されるのか見守っていきたい。

投与毒性の代替法を確立させるべく、コスモスタント「ダード」というプロジェクトが開始されており、今後5力年で代替法の確立を目

た製品の安全性を裏付け、信頼性をより高めることができる」と期待している。またJaCVAMにおいて医薬部外品の申請資料と

― 確立されていない試験法への対応は。

皮膚刺激性の評価にあたり、構造活性相関や既存データの利用、代替法の組み合わせに関する議論が国際的になされている。代替法の開発を待って眼刺激性、感作性の評価も同様の取り組みがなされていくと思われ。一方、昨年からの反復

指している。

― 日本で開発された代替法の評価は。

日本で開発された試験法がOECDガイドラインにリストアップされる例も出てきており、今後さらに増えていくことが予想される。日本の代替法開発力をアピールすることで、技術力の高さに加えて開発され

世界スタンダードめざす

― 今後の代替法開発のビジョンについて。

化粧品のみならず、医薬品や化学など業界を超えて安全性を担保できる代替法開発を進めていく。現在、厚労省から遺伝毒性試験、内分泌かく乱試験、経産省から反復投与毒性試験、農水省から動物由来原料の医療用新素材による眼刺激性および皮膚感作性試験代替法モデルの開発など、行政下での代替法開発プロジェクトを実施しており、日本発の代替法技術が、これから世界のスタンダードとして定着することを目指す。